
エンカウトメモリーズ

露草 遊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンカウントメモリーズ

【Nコード】

N4222BA

【作者名】

露草 遊

【あらすじ】

関東圏のとある都市。双葉市で一つの不可解な殺人事件が起こった。

不可解、それは、第一発見者であり重要参考人である少年は、記憶喪失であるということだ。

少年は、記憶を取り戻そうとがきながら、真実を求めて、手を伸ばした。

この作者はミステリー初執筆です。こんなのミステリーじゃねえw

Wなどと多々思つかもしれませんが生暖かく見守ってもらえれば幸いです。

～1～（前書き）

どうも露草です。ミステリーなんて書いてしまいました。自分で書いておいて、最後まで書けるのか甚だしく不安です。とりあえず、読んでもらえると嬉しかったり。

〜1〜

起きると、見知らぬ天井だった。

「……ここ、どこだ？」

俺は、首を動かして、周囲を見回してみた。

女の部屋のようなだった。妙に小奇麗でファンシーな縫いぐるみがソファや、そこら中にあり、女性物の下着が落ちていたのが決め手だ。片付いてはいるが、若干、片付け方が荒いのも特徴だった。ワnlームで、ベッドからまっすぐ玄関が見える。その事から推測すると、どこかの安いアパートの一室だろう。キッチンは小さくとも、ちゃんとしたものが備え付けられている。

「にしても、どこだ？ここ」

俺は、同じ疑問をもう一度口にして、上半身を腹筋で持ち上げ、とりあえず、ベッドから体を出した。

部屋に漂う冷気に身を竦めた。自分の服装を見てみると、地味な灰色のスウェットを着ているだけだった。寝間着なのだろう。

改めて、周囲を見回してみたが、何の手がかりも得られない。

「むっ……」

唸り声を上げて、俺が考え込んでいると、ブーブーブーブー……。

「おっ」

音源の先、卓袱台の上に視線を向けると、そこには――、スマートフォンが。

手に取り、何故だがスムーズに動く指先に任せて、振動の原因をチエックした。

原因は、メールだった。どこからかの迷惑メール。内容は、出会い系。

全くもって手がかりにならなかった。

「はぁ……」

溜息を附いて、

「あつ、そうだ、プロフィール！」

思い出して、声を上げ、スマートフォンを指先で操作しようとした。もちろん、目的はこの部屋の持ち主の特定だ。

その時、突然の尿意。

「ッ……、と、トイレ！」

尿意に襲われ、トイレがあるであろう場所――玄関付近に俺は、足早に向かった。

そこにトイレは無かった、なんていう事はなく。トイレは、当然の様に玄関脇にあった。

俺は、トイレの電気を付けて、ドアノブを捻り。外に引くと、

「うおっ?!」

何か、大きな何かが転がり出てきた。

「はあっ?!?!」

思わず、目を剥き、叫んだ俺の視線の先には、

女。

「へ？」

混乱、そして違和感。違和感の正体には、一瞬で気づく。

そう、一糸纏わぬ姿、つまり全裸だった。

しかも、

「え、なんで?なんで？」

俺の混乱度合いは更に高まっていく。俺の視線は、とある一点を捉えて、動かなくなった。

その一点とは、女性の胸。決して、見惚れていたわけではない。唯、現実として、それを対処できなかった。それだけだった。

そこには、刃が僅かに外気に晒されている木柄。

それは、一本の包丁。

その包丁が女性の双丘の間に突き刺さっていた。

「ツツ——?!?!」

それだけの事で、俺の頭の中は、グチャグチャ。思考なんてまともにまとまらなくなっていた。

数十秒。そうやって、女性を見下ろしていた。

そんな俺の頭の中に浮かんできたのは、一つの言葉。

『殺人』

更に、浮かんでくる、言葉の群。

『どうして?』

『誰だ?』

『なんで?』

『誰が?』

『殺った?』

言葉が浮かんで消えていく中、それだけが、鮮烈な色をもって残っていた。

そこで、ようやく自分の取るべき行動に気付いた。

「そつ、そつだ！警察！」

今、手元には、誰かの知らないスマートフォンがあるのみ。だが、仕方がない、持ち主には、悪いが緊急事態だ。申し訳ないが使わせてもらおう。

押す番号は、決まっている。

「いち、いち、ゼロ……」

動揺して手が震えている。押し間違えないようにに声を出しながら、入力。耳に、スマートフォンを付ける。

深呼吸をして、どうにか、動揺をどこかにやろつと頑張った。

『はい、警察です』

落ち着く前に、警察が出てしまい、それも意味がなかったのだが。相手は女性らしい。少し高めの声が特徴的で、事務的な喋り口調が板についていた。

「——あ、ああ、しつ、死体を発見したんですよ！至急来てくださ
い！」

『——落ち着いてください』

「は、はい……」

俺は、警察の方に諭され、深呼吸をもう一度、繰り返した。
落ち着いた頃合いに。

『では、貴方のお名前と、発見場所の住所、もしくは、目印になる
物を教えてください』

「えーと、住所住所……」

俺は、何か手がかりを探して、周囲をうろつろしていると、

「お、請求書！」

俺は、声を上げて、卓袱台の上にある封筒に素早く手を伸ばした。

「えーと……住所は……」

電気代の請求書には、部屋の持ち主らしき名前と各種個人情報。その中の住所を伝え、自分の名前を言おうとしたその時、
気付いた。

もつとも、大切な事に俺は、今頃、気付いた。

「あ、ああ……」

声が、口から勝手に、こぼれた。

スマートフォンが通話状態のまま、床に落ちた。

声がそこから聞こえてくるが、全く、耳に入らなかった。

「俺は……俺は……」

そして、今、気付いた事実。

それは、

「俺は、誰だ……？」

名前が思い出せない。それどころか自分の事、他の誰かの事。何も思い出せない。

そして、それが意味するのは、

「記憶、そう、しつ……？」

呆然と疑問が混ざり合った声は、小さく響き、消えた。

「俺は……」

その部屋に響くのは、受話器の向こう側の女性の声だけだった。

ゝ1ゝ（後書き）

感想、誤字脱字の指摘などお願いします。どちらでもしてくれれば
感謝感激です。

くく (前書き)

どうも、露草です。

今、男子高校生の日常を見ているんですが……面白いですね。ええ、あんな作品を書いてみたいものです。とりあえず、どうぞ。

く2く

「まーた、厄介な事件だな……。めんどくせ。帰って寝たい……」

やる気なさそうな声を上げる中年男は死体（先の少年が発見した女性の死体だ）を見下ろしていた。

無精髭の目立つ、四十代前半ほどの男だった。心底面倒くさいといった様な表情とダルそうに曲がった猫背が特徴的だった。

男は、だらしなく着崩したスーツの内ポケットからライターとシガレットケースを取り出し、一本タバコを取り出した。口に咥えて、火を付けようとする、

「現場は禁煙です。栗林刑事」
くりばい

と、聞こえてきたと思うと口からタバコを抜き取られた。

「おい、いいだろ。徹夜続きなんだよ」

ヤル気のない隈の濃い目をタバコを口から抜き取った主に向け、非難の声を上げた。

「決まりは決まりですので」

しれっと答え、非難の視線にも動揺をすら見せないのは、地味なスーツスカートを着た、一人の女性。容姿は整っているのだが、洒落っ気は皆無で、事務的な雰囲気しか伝わってこない。まったく感情の浮かんではない顔に掛けてある眼鏡はフレームレス。その奥の目には、感情の起伏などは皆無だった。悪くとれば、無感情。良くとれば、クールビューティー。

女性は、取り上げたタバコをティッシュで包み、肩に掛けてある黒のポーチに仕舞った。

「後で返せよ。それ、高いんだから」

「分かりました。水に二時間ほど浸けておきましょう。いい感じに仕上がるでしょうから。あと、吸い口に塗る毒は、麻痺か遅効性どちらがいいですか？どっちにしる、死にますけど」

「……もういい。それ、捨てといてくれ」

「分かりました」

死体の前でそんな漫才を繰り広げている二人に、周囲の冷たい視線が集中する。だが、二人は、全く気にした様子はなく、マイペースを貫く。

「さてと、じゃあ、害者の身元その他もろもろ説明よろしく」

「はい、分かりました」

秘書風の女性は、ポーチから手帳を取り出し、開いた。

「被害者の名前は、加賀屋桂花。二十二歳、独身。職業は、一般企業のOLです。この現場は、被害者の自宅です。管理人に確認は、してあります」

「致命傷は？」

「胸……正確には、鳩尾に刺さった包丁です。他には、外傷もなく、それが致命傷であると考えるのが妥当かと」

「なるほど、第一発見者は？」

「その、事なんです……」

珍しく言いどもる彼女に、栗林は、眉をひそめた。

「どうした？何か問題でもあったのか？」

「第一発見者の身元、というか、発見者自体に問題がありまして…

…」

「問題？」

ええ、と相槌を打って、

「記憶喪失。らしいです」

「は？」

思わず、目を点にしてしまう栗林。

「なんじゃそれ？」

「言葉通り、ですが……。まあ、その反応は予想済みですけど」

言葉に僅かな苦笑を含ませ、彼女は、次の言葉を紡ぐ。

「現在、彼の身元を探っています。時間と共に彼の身元は判明するでしょうけれど……。この不可解な事件。それだけで解決するとは思えません」

栗林は、大げさな溜息をついて、

「面倒くさくなりそうだな」

「その通りですね」

言葉を交わして、鑑識の人間が死体を運んでいくのを二人は目で追いかけた。

「ほんと、面倒くさくなりそうです」

珍しくそんな発言をする彼女——鐘崎かねざきに興味深げな目を向けたが、特に追求はしなかった栗林だった。

「とりあえず、現場検証始めるか」

栗林の一言に鐘崎はコクリと頷いた。

ゝ2ゝ（後書き）

今回は短めです。感想、誤字脱字の指摘を下されると作者は感謝しつつ、小躍りを始めたくなります。

くっく (前書き)

どうもく露草です。

お腹減りました…… (笑)

まあ、そんなことよりもぐっぐ。

く3く

と、その頃、死体を発見した記憶喪失の少年は、と言うと――、

「美味しいですね、これ」

今、俺は、病院内の食堂でご馳走されていた。

朝早く連れてこられ、診察のまでの時間が随分ある。さて、どうしようか……。と思った矢先に腹が鳴り、だが、金は無い。といった状態で俺は、先ほどまで診察室前の廊下のソファで困っていた（服装はスウェット上下なため、患者と勘違いされていたのか、特に怪しまれなかった）。

と、そこへやって来た、手入れの行き届いたロングの茶髪が特徴的で、白衣を押し上げる双丘は、男の性の集中を過度に引き連れた看護師の倉岡さんが、

『食堂で朝食でもどう?』

『よろこんで』

倉岡さんの誘いに乗った。というのが、ここまでの経緯だ。

俺の目の前のテーブルには、双葉市立（ここはそういう名前の市らしい）大宮病院食堂特製朝食メニューUセットがあった。ちなみに、^{アンソウ}Uは未確認のU。

セット内容は、白米、焼き魚（切り身で、なんという魚かは不明）、味噌汁（具（謎）?）、何か得体のしれない緑色の草の和え物、何かの卵焼き（色は黄緑）だ。

注釈文とメニューに写真が無いのを見ると、薄っすら寒いものを感じ

じるが、兎に角、頼んでみようということで、来たのがこれだ。最初、焼き魚のドギツイ色に辟易はしたものの、食べてみると意外にいける。

その前に、こんな試作品、メニュー載せていいのか…？

軽く首を捻り、疑問に思ったが、

まあ、いいか。

と、疑問をスッパリ切り捨て、俺は、テーブルの向かい側でコーヒ―を啜る倉岡さんに笑顔を向けた。

「意外とイケますね」

「え、ほんと？メニューに出てから誰も注文してないし、でも、自分で。っていうのは、嫌だし。君が注文してくれ良かったよ。一つ謎が解けた」

「はは、俺、実験台ですか」

苦笑する俺に、倉岡さんは、いたずらっぽく笑う。

「でも、お金ないし、タダ飯にありつけたんだから。チャラよチャラ」

「ですね。ていうか、一口、どうです？」

焼き魚を一口サイズに箸で分けて、挟む。

「そうね、一口いただくわ」

あーんと、倉岡さんは、前のめりになり口を開いた。

若干のドギマギと共に彼女の口に慎重に箸で挟んだ魚を運ぶ。
艶かしく唾のを引いているのと、口内が軽く覗ける。別段、淫猥で
もないのだが、何故かエロスを感じてしまう俺だった。

平常心。平常心。

心のなかでそう呟いて、暗示を掛けながら慎重な箸使いで、倉岡さ
んの口に魚を運んだ。

パクリと倉岡さんの口が閉じられた。そこから、俺は、箸を抜き出
す。

「ふふふ……」

咀嚼し、魚を飲み込んだ彼女は、小さく笑みをこぼす。その妖艶さ
にやられてしまったのか、自分の頬が赤く染まったのを感じ、俺は、
照れ隠しに笑った。

その場に居た独身男性一同の心情をここに記述しようと思う。

『死ね！リア充！』

「そっぴゃ、倉岡さんって、彼氏いるんですか？」

「いないわよー！。仕事が忙しくて男漁りも出来ない……。ああ、
結婚したい。彼氏欲しい……」

「順序逆ですよ」

俺が苦笑すると、そうね。と、倉岡さんも一緒に苦い笑みを浮かべ
た。

「そういう君は、彼女いるの？モテそうだけど」

「いやー、それが俺、記憶喪失で。自分の事なんにも分かんないんですよね」

ははは……。と、枯れた笑いを俺が上げると、倉岡さんが、

ヒシッ。ムギユ。

テーブルごしに俺の頭を抱きしめてきた。

「へっ？」

「ごめんなさい。君の事何も知らないのにデリカシー無く聞いて……。一人ぼっちの世界で辛いのにこんな事聞いて……」

倉岡さんの腕の力が強まるとともに、俺の顔は、その大きな胸に顔を押し付けられる。

倉岡さんからは、薄っすらと香水の匂いと、彼女自身の甘い匂いが混ざって、かなり良い匂いになっていた。それに、思春期特有のメーターはビンビン反応してしまう。

追い打ちを掛けるような胸の柔らかさは、まるで、天国。永遠に味わっていたいと、思わせるほどの魅力。

「ごめんなさい」

再度、彼女の腕の力が強まるのに、不思議と安心感を感じてしまう俺だった。

「別にいいですよ」

「でも……」

「だって、もう俺は独りじゃない」

「え……」

若干、拘束する腕の力が緩まったのを感じ、胸に埋もれていた顔を抜き出した。それから、彼女の潤んだ瞳と視線を合わせて、

「俺には、俺のことを心配してくれる、初対面なのにこんなに大事に思ってくれる、倉岡さんという女性がいるから。」

——もう、独りじゃない」

「君……」。

ふふふ……そうだとしたら、さつき拾って正解ね」

「拾うって……」

苦笑する俺に、彼女は、笑いかけ、

「だって、捨てられた子犬みたいな目をしてたから。でも、それは違ったわね。君は、子犬なんかじゃない。そんな弱い存在じゃなかった。」

「ただ、今は抱き締めさせて。貴方の大きな空白に私というピースをはめさせて」

「詩人ですね」

「そうね。私、今まで生きてた中でも珍しいくらいに一生懸命で感傷的だから」

倉岡さんは、再び、俺を強く抱きしめた。俺も、それに身を任せた。

それに冷たい視線を向けている独身男性諸君の言葉をここに刻もつ。

『ラブコメやめろ（怒）』

『リア充爆発しろ!!』

『よくも俺らの倉嶋さんを……!!許さん!!』

E t c e t c

そんなこんなで、俺が朝食を食べ終わる頃、診察が再開する時間になった。

「診察、がんばってね。あ、これ、私の連絡先だから」

倉岡さんに手を振り、ついでに倉岡さんの連絡先をゲットして、俺は、一階にある食堂を後にした。向かうのは、三階にある、精神科の診察室だ。

く3く（後書き）

感想、誤字脱字の指摘お願いします。

ゝ4ゝ（前書き）

どうもー露草です。今日も疲れました。ああ、学校とか滅べばいいのに……。

そんなことより本編どうぞー。

その食堂には、栗林と鐘崎の姿もあった。
勿論、第一発見者である少年の様子見である。

「あれが第一発見者って……子供じゃねえか」
「ですけど、ジゴロとしての能力は目を見張るものがあります。
会って数分の女性から連絡先をひき出してしまっ……末恐ろしいで
す」

冷静沈着に少年を分析する鐘崎。

「同感だ。あれは将来、化けるぞ」

唸りを上げて、感心する栗林。

「で、発見者の身元、判明したか？」

「いえ、全く、といつてもいいほど情報が入って来ません。
代わりといったは、難ですが、被害者の職場に聞きこみに行つて来
ました」

「ほお、どうだった？」

「ええ、彼女の上司の話ですが、彼女は、仕事もしっかりとこなし、
人付き合いも見たところ問題はなかった。そうです」

「つまり、特に情報は無かった。だな」
「その通りです」

栗林は。はあ……。と、大きく溜息を漏らし、

「進展は無し、か」

栗林は、コーヒーの入ったカップを口に運ぶ。

「……美味しいな」

「……ほんとですか？」

「嘘を言っただけです」

「では、私も注文してきます」

鐘崎が席を立つのを横目で追い、栗林は、携帯を取り出した。かなり古い携帯だ。本体に無数の細かい傷が入っている。折り畳みで、開くと、ディスプレイにはヒビが入っていた。待受は、栗林と、彼と同じくらいの年齢の栗毛の女性。かなりの美人だ。その間には、一人の小さな少女。輝く笑顔が眩しい。

「はあ……。また、暫く帰れないな……」

うんざりしたような溜息を漏らし、栗林はそうぼやいた。

「にしても、記憶喪失か……」

都合が良すぎるのもあるが現場の状況といい、今回は、第一発見者〃重要参考人とい構図か？

それとも、他に何かあるか……」

栗林は、もう一度、コーヒーを啜って、思考の海に浸った。

ちょうど、その時、鐘崎は、注文して出てきたコーヒーにある物を注いでいた。

彼女の手にある缶には、『ドクターペッパー』の文字。

シユワシユワとした炭酸がコーヒーの中に注がれていく。

ちなみに、『ドクペ混ぜなきゃ飲み物じゃない』とは、彼女の名言

である。

心底どつでもいい名言だった。

ゝ4ゝ（後書き）

感想と誤字脱字の指摘お待ちしております（＾－＾）／

く5く（前書き）

どうも、露草です。

今日は寒い。冬眠したいなあ……。人でも出来るのかな……。

……………そうだ。肉まん食べよう。

戯言でしたww

でわでわ、どうぞ。

5

「全生活史健忘……？」

俺は、聞きなれぬ（？）言葉に首を傾げた。

「そう、全生活史健忘。」

黒髪を首元あたりで切りそろえ、フレームの細い赤縁の眼鏡を掛けた女医さんは、そこまですべてを淡々と語って、口元を緩めた。

「記憶障害の一種だ。まあ、絶賛記憶喪失中の君に言うのも難だが、最初、気づいた時、『ここはどこ？私はだれ？』って、テレビドラマのようなベタな反応をしただろう？その事だよ。まあ、記憶障害っていうのは、どれも長期の治療になるからこれからよろしく。」

「——えーと……」

女医さんは、そこまで、平然と語っておいて、唐突に困ったように頬を掻いた。彼女の困り顔の意味に気づいた俺は、

「あー、すみません。名前、俺も自分の名前を知らないんですよ。ていうか、忘れたんですよ」

乾いた笑いを上げ、困り顔で助け舟を出した。

……もっとも、助けて（どうにか）して欲しいのは、俺の方なのだが。

「……不覚だったな。まあ、当たり前なのだが……。私の配慮が足りなかった……。すまん……」

頭を下げた女医さんに、雪弥は慌てて、

「い、いや、別に頭下げなくても……」

「いや、これは、医者としてのミスだ。すまない……」

深く深く頭を下げる彼女に、俺は苦笑した。

「——いいんです。そんなに謝るくらいなら、俺に名前を呼び名でもください」

「……分かった。そうだな、呼び名が無いと不便だな……。ほんとに、私で？」

彼女の確認に頷いて、肯定。

数十秒考え込むと、彼女は、口を開いた。

「それなら君の呼び名は——」

一息置いて、

「幻想殺し」

「却下です」

ていうか、見てるんだあのヲノベ。

「じゃあ……一方通行」

好きなんですね。ワカリマス。

「他」

「うーん、超電磁砲」

「いい加減離れましようよ。禁○目録」

「そうか……じゃあ……」

少し考えこんで、

「竜破斬」

「必殺技になってんじゃねえか!!」

思わず立ち上がって怒鳴る俺。

「どうしたんだい？なんだ、落ち着く注射打とうか？」

「……次」

くっそ、この医者、権力使いやがった!! 楯突くなら精神安定剤使
うってか!! ていうか、そのうちもつと危ない系の薬だしそれで怖
い……。

「じゃあ、少年A」

「……特に異論は無いです」

女医さんの自信満々といった態度に負け、俺はその呼び名をを了承
した。……渋々。

「じゃあ、症状を説明しようか。」

全生活史健忘とは、簡単に説明すれば、自分のことを全て忘れてし

まう、心理的ストレスや、頭部に負った傷などが原因なのが主だ。君の場合は、確実に心理的要因だろうね。外傷は皆無。となると、心理的要因しかありえない。

まあ、君の演技、というのもあるが」

「まあ、演技の線は無いですよ……。演技だったら、警察呼びませんし」

俺が苦笑しつつ、作る言葉に頷いて、肯定。

「その通りだな。

なので、演技というのは除外してもいいだろう。

で、君の心理的要因なんだが……。解明のしようが無い。催眠治療っていうのもあるがな、効果は薄いが、今度、手配をしておこう。だが、先程も言ったように、長期に渡る治療になるのは確定だ」

「そうですよねー。じゃあ、よろしくお願いします」

「任された」

笑顔で胸を叩く女医さんの笑顔に見惚れかけて、俺は、思わず苦笑した。

ゝ5ゝ（後書き）

感想を下さると作者は凄く嬉しかったり（チラ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4222ba/>

エンカウントメモリーズ

2012年1月13日18時56分発行